

いま

70年 芸術が面白い!

PP

知られざる昭和の 大衆文化運動

Proletarian Art Matters Now : The Showa Era's Little-Known Mass Culture Movements

市立小樽文学館



企画展

いま、プロレタリア芸術が面白い！

Proletarian Art Matters Now: The Showa Era's Little-Known Mass Culture Movements

知られざる昭和の大衆文化運動

2019年7月6日(土)～8月18日(日)

市立小樽文学館

主催：昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会・市立小樽文学館

協賛：法政大学大原社会問題研究所

いま、プロレタリア芸術が面白い！

知られざる昭和の大衆文化運動

ごあいさつ

大正末から昭和戦前期は「大衆」の時代でした。中でも、1920年代初頭から30年代前半にかけて「プロレタリア文化運動」と呼ばれる大衆運動が盛んになり、東京・大阪などの都市部を中心としつつ、全国各地で無名の労働者や農民たちが運動に参加しました。

この運動は、社会主義・共産主義思想の影響を受けつつ、芸術活動を通してプロレタリアート（労働者階級）の待遇の改善や、戦争反対などを主張し、みずからの生活に根ざした芸術と文化を求めるものでした。

この小樽で成長した小林多喜二（1903～33）は、「プロレタリア文学」の作家として知られていますが、当時の運動は文学だけではなく、演劇・美術・音楽・映画など、さまざまな分野にまたがって展開された総合芸術運動でした。

特に、「プロレタリア演劇」の勢いはすさまじく、多くの観客が劇場・芝居小屋に足を運びました。演劇以外にも、全国各地で美術展や映画会・音楽会が開催されたり、読書サークルが作られたりしました。数万、あるいはそれ以上の人々が、こうした「プロレタリア芸術」の受容者となり、時にはこれを広めようとする運動に積極的に参加していったのです。

こうした広範囲に及ぶ大衆文化運動の中では、実に多くの「ビラ」や「チラシ」、「ニュース」「パンフレット」などが作成されました。本展は、そうした貴重な歴史資料を数多く収集した『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』（丸善雄松堂 2017年）の刊行をきっかけとして企画されました。本館の池田寿夫旧蔵資料に加え、故浦西和彦氏所蔵（現日本近代文学館所蔵）、大原社会問題研究所所蔵、札幌大学図書館所蔵の文化運動資料が一堂に会するまたとない機会です。

大衆文化運動を支えた無名の人々の熱い息づかいを、これらの展示資料の行間からお感じいただけますと幸いです。

本展覧会の開催にあたり、格別のご高配を賜った所蔵機関および関係各位に、心よりお礼申し上げます。

（主催者）

展示説明について

展示説明文（キャプション）は下記の順に表示しています。

- ・展示番号
- ・資料タイトル
- ・発行年または作成年
- ・所蔵元＊ [DPRO 番号 ＊ ＊]
- ・説明

＊所蔵元の表記には、下記の略称を使用しています。

- 小樽……小樽文学館所蔵（池田寿夫旧蔵）の資料
- 浦西……日本近代文学館所蔵（浦西和彦旧蔵）の資料
- 大原……法政大学大原社会問題研究所所蔵の資料
- 札大……札幌大学図書館所蔵（松本克平旧蔵）の資料

** DPRO 番号

『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集 [DVD 版]』(丸善雄松堂, 2017 年)に収録されている場合は、その資料番号を [] 内に記載。本企画展において写真パネルで展示されている資料のうち、DPRO 番号が記載されている資料については、この DVD 版資料集より画像を転載しました。

いま、プロレタリア芸術が面白い！ (はじめに)

「プロレタリア芸術」「プロレタリア文化運動」などというと、少し難しく聞こえるかもしれません。「プロレタリア」とは、一般に「労働者階級」のことですが、本展覧会では「働く人とその家族」、そしてそれを「支援する人々」、あるいは働かなければ生きていけないが「働けない人びと」も含めて、広く捉えたいと考えています。

そうした、「(広い意味での) 働く人びと」によっておこなわれた芸術・文化活動が「プロレタリア芸術」「プロレタリア文化運動」だったのです。

こうした運動において、小林多喜二のような著名人の存在は重要です。しかし、多喜二もある時は「観客」の一人として、演劇や美術展を見たはずですが。一方、無名の「働く人びと」もまた、時には雑誌に感想や詩を投稿し、時には舞台を裏方で支え、時にはガリ版印刷をしたことでしょう。誰もが「創作する人」となり得るし、また、誰もが「受容する人」でもある。そしてその中間で「支える人」にもなる。それが「プロレタリア文化運動」なのです。

これらの運動は、マルクス主義・共産主義思想の影響を強く受けていました。こうしたイデオロギーには今なお賛否両論あります。しかし、まずは「表現されたもの」それ自体の面白さや、「表現すること」をめぐる人々の工夫・葛藤・情熱を感じ取っていただきたいと思います。

最初に、3名の文化運動当事者(池田寿夫・山田清三郎・松本克平)が遺した資料についてご紹介します。

(村田裕和・伊藤純)

0-1

池田寿夫旧蔵 文書綴り

1929～33年

小樽

プロレタリア文化運動の中心的活動家であった池田寿夫* {いけだひさお} (1906～44:新潟生まれ。本名横山敏男)は、活動中の貴重な組織資料や関連の書籍・雑誌を数多く残した。資料はご遺族によって大切に守られ、2009年に小樽文学館に寄贈された。ここにあるような「文書綴り」は、全部で19冊ある。

*正しくは「池田壽夫」ですが、本展では新字で表記しています。



0-2a

池田寿夫著『日本プロレタリア文学運動の再認識』(三一書房)

1971年

個人蔵

池田は旧制新潟高校から東大へと進み、在学中の1929年、日本プロレタリア作家同盟に加入した。32年には、26歳で日本プロレタリア文化聯盟(略称「コップ」)の機関誌部長に就任。しかしまもなく逮捕投獄された。1936年に転向(共産主義思想を捨てることを宣言)し、出獄。本書は、この時東京地方検事局に提出された「手記」がもとになっている。(図録コラム①参照)

0-2b



池田寿夫（北満ハイラルにて）

1940 年秋

池田寿夫著『日本プロレタリア文学運動の再認識』所収

1936年に釈放された後、池田寿夫は、満洲（中国東北部）・内蒙古にわたり寒冷地での米生産を研究指導。1944年（昭和19年）肺結核のため新京（現長春市）で死去した。

コラム① 池田寿夫著『日本プロレタリア文学運動の再認識』について

池田寿夫『日本プロレタリア文学運動の再認識』には、自分が中心になって展開してきたプロレタリア文学運動についての、極めて冷徹な分析と強烈な批判が満ちあふれている。

例えば――

◆プロレタリア文芸評論家の蔵原惟人（1902-91）が提唱した理論について、理論や方針が要求するものを現実の中から無理に探し出そうとするような「観念論的方法」の危険を含んでいると批判。

◆さらに具体的には、「〔共産〕党や〔労働〕組合の組織的および政治的影響を拡大強化することは……革命的文化団体の任務である」という蔵原の言葉を、「文化運動と……政治・経済闘争との間にある本質的差別を抹殺していた」と真っ向から否定。

◆蔵原理論に追随した小林多喜二の「組織は大衆的でも指導はボルシェヴィキ的でなければならぬ」という有名なフレーズを、「弁証法は神様でないからどこからか忽然とあらわれいでて、矛盾を統一するなどという魔法を使うわけにはゆかぬ」と揶揄。

ほんの数年前まで運動自体を指導していた本人からの批判であるから、「アンタにいわれたくないよ」という反発もあっただろう。また、検事局監視下に刑務所の中で「転向文書」として書かれたものではないか、という蔑視もあるだろう。

しかし戦後、評論家の平野謙は、プロレタリア文学運動の極めて優れた批判と総括であることを発見し、これが池田寿夫の本音だと心を込めて弁護している。作家同盟が解散して数年後という極めて早い時代に、今読んでほとんど古びた感じがしない鮮烈で根源的な批判を書き切った、という点で、この本と池田寿夫は、もう一度再評価されるべきではないだろうか。

（伊藤純）

0-3a

山田清三郎アンケート（「宮島資夫」の回答）

1929 年

浦西 [0046]

プロレタリア作家・評論家の山田清三郎^{やまだ せいざぶろう}（1896-1987）は、『プロレタリア文学史』（理論社、1954年）などによって戦後の文化運動研究を方向付けた。この資料は、山田が1929年当時プロレタリア系と目される作家たちに、経歴やプロレタリア文学に入った動機、主な作品などを尋ねたアンケート。42名分の回答書が残っている。（図録コラム②参照）



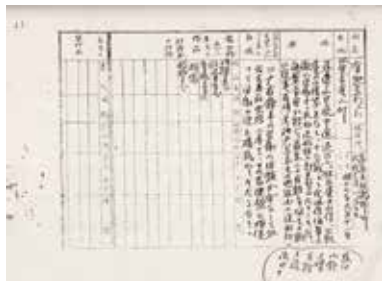
この宮島資夫^{みやじますけお}（1886-1951）の自筆略歴には、「四谷尋常高等小学校四年で退学。砂糖問屋ラシヤ屋三越の小僧歯科医の書生、メリヤス職工電気職工、機関工見習、雑誌医学生論輯助手、相場、金貸の手代鉦山事務員、土方、火夫、その他」などとある。

0-3b

山田清三郎アンケート（「宮地嘉六」の回答）

1929年

浦西 [0046]



宮島と同じ労働文学作家の宮地嘉六（1884～1958）の略歴には、「尋常小学校中途退学、仕立屋の小僧、下駄屋の小僧等をなし、十三歳より佐世保海軍工廠に労働す。最初造船鉄工部見習工たりしも、後、旋盤工見習に転じ、爾来二十有余年間その職に従事、長崎、呉、神戸東京その他諸国の造船所或は小鉄工場を転々流浪せり」などとある。

この「山田清三郎アンケート」は文学研究者の浦西和彦（1941-2017）が所蔵していた。浦西は、プロレタリア文学や関西文学を専門とする書誌研究家で、生資料（一次資料）を求めて全国を訪ね歩き、膨大な資料を収集した。本展覧会で「浦西」

とあるのが、氏の旧蔵資料（現在は日本近代文学館所蔵）である。

0-4

松本克平スクラップ・ブック

1920～30年代

札大

松本克平（1905-95）は、新劇俳優・演劇評論家。現在の長野県安曇野市に生まれた。1929年に東京左翼劇場に参加して、後に村山知義（1901-77）の新協劇団に入った。戦後はテレビや映画でも活躍している。特高に奪われるたびに資料を集め直したといい、その執念が実って、『日本社会主義演劇史 明治大正篇』（1975年）などの貴重な記録を残した。



0-5

松本克平著『八月に乾杯 松本克平新劇自伝』（弘隆社）

1986年

個人蔵

『吼えろ支那』（トレチャコフ作）にエキストラ出演して以来、『母』（ゴリキー作）、『全線』（村山知義作）など、左翼演劇の主要な演目のほとんどに松本は出演した。本書には700名を超える演劇人が登場する。

コラム② 山田清三郎アンケートについて

アンケートに残された回答書は、以下の42名分である。

1 今野賢三、2 金子洋文、3 加藤由蔵、4 中野正人、5 佐野袈裟美、6 加藤一夫、7 岡下一郎、8 吉田金重、9 井東憲、10 秋田雨雀、11 山川亮、12 武藤直治、13 犬田卯、14 藤森成吉、15 新井紀一、16 内藤辰雄、17 宮島資夫、18 宮地嘉六、19 藤井真澄、20 森山啓、21 大森二郎、22 立野信之、23 細田民樹、24 明石鉄也、25 岩藤雪夫、26 江馬修、27 越中谷利一、28 小島島、29 鹿地亘、30 佐々木孝丸、31 壺井繁治、32 中野重治、33 葉山嘉樹、34 橋本英吉、35 平林たい子、36 細田源吉、37 佐左木俊郎、38 槇本楠郎、39 窪川いね子、40 黒島伝治、41 山内房吉、42 本庄陸男（*掲載順、番号は便宜的に付した）

このアンケートの驚くべき特徴は、プロレタリア文化運動の先駆けといわれる雑誌『種時く人』（1921-23年）の創立同人（金子洋文・今野賢三ら）や、大正中期の労働文学の作家たち（宮島資夫・宮地嘉六ら）、また、当時ナップ派と厳しく対立していた労農派（雑誌『文芸戦線』のグループ）の作家たちの回答が数多く含まれていることである。

アンケート項目の中でも興味深いのは、「略歴」欄である。特に、働く人々の貧困と苦しみに正面から取り組んだ労働文学の作家たちの経歴をみると、ナツ派の作家たちが大学出の高学歴者が多いのは打って変わって、さまざまな職業が並んでいる。

たとえば黒島伝治（1898～1943）の略歴には、「百姓、漁業、醤油工場の労働雑誌記者等の経験がある、大正十年頃、西伯利亞にゐたこと〔＝軍隊経験〕もある。大正十五年、「文戦」同人となる」などとある。

アンケートを実施した山田清三郎自身、小学校を中退してさまざまな職を転々とし、プロレタリア文学運動に参加した。プロレタリア文学は、このような働く者たちによって、地の底から立ち上がるかのように成長してきたのだった。

（伊藤純）

コラム③ おもな団体とその略称

文化運動団体の名称には、しばしば略称が用いられました。その多くはエスペラント語表記の頭文字からとられています。

I ナツ派

①全日本無産者芸術連盟（ナツ派, NAPF）

1928（昭和3）年3月15日の共産主義者・労働運動家への大弾圧（3・15事件）のあと、プロレタリア芸術聯盟（プロ芸）と前衛芸術家同盟（前芸）が合体して創立された。文学部・美術部・演劇部・音楽部・映画部・出版部があった。機関誌『戦旗』。1928.3.25～1928.12.25

②全日本無産者芸術団体協議会（ナツ派, NAPF）

上記のナツ派がいったん解散し、各部を独立団体（下記の④～⑦、および日本プロレタリア音楽家同盟 [PM]、戦旗社）として発展させて、その連絡団体として略称はそのままに設立された。実質的に各同盟および各地方支部の上位団体として指導的役割を果たした。1928.12.25～1931.11.[.]

③日本プロレタリア文化聯盟（コップ, KOPF）

ナツ派を発展・拡大して、日本プロレタリア写真同盟（プロフォト）、無産者産児制限同盟（プロBC）、日本プロレタリア・エスペランチスト同盟（ポエウ）、日本戦闘的無神論者同盟（戦無）、プロレタリア科学研究所（プロ科）、新興教育研究所（新教）、プロレタリア図書館が加わって設立された。非合法の共産党の指導下に置かれたため、苛烈な弾圧を受け消滅した。1931.[10月頃]～1934

④日本プロレタリア美術家同盟（AR, のち PP）

上記②③の加盟団体。柳瀬正夢・大月源二らが所属した。1929.1.22～1934.1.16

⑤日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）

上記②③の加盟団体。佐々元十・岩崎昶らが所属した。1929.2.2～1934

⑥日本プロレタリア劇場同盟（プロット）

上記②③の加盟団体。のち日本プロレタリア演劇同盟と改称（略称は同じ）。東京左翼劇場、大阪戦旗座、京都青服劇場、新築地劇団などの劇団とその構成員が所属した。1929.2.4～1934.7.15

⑦日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）

上記②③の加盟団体。小林多喜二・徳永直らが所属した。1929.2.10～1934.2.22

II 文戦派

労農芸術家聯盟（労芸, 文戦派）

プロレタリア芸術聯盟を脱退した人々が結成した芸術運動団体。1927年11月、前芸の人々が脱退して弱体化したが、次第に勢力を回復してナップと対抗しつつ文化運動を盛り立てた。『文芸戦線』を機関誌としたため文戦派とも呼ばれた。ナップへと走る者が続出し、「文戦打倒同盟」（1930.11）「第二文戦打倒同盟」（1931.5）が結成された。1927.6.19～1932.5.15

第1章 一枚のチラシから見えてくる `新たな世界`

プロレタリア文化運動では、イベントを告知したり、さまざまな主張を大衆に届けるために「ビラ」「チラシ」が活用されました。ビラやチラシは、運動に不可欠の「メディア」だったのです。また、組織の内部では、「ニュース」や「報告書」が、数多く発行されました。これらの多くでは「ガリ版」と呼ばれる謄写版印刷が用いられています。少数の印刷に優れたガリ版は、肉筆の味わいも残っていて、その紙面からは作り手たちの個性や彼らが置かれていた状況まで伝わってくるかのようです。

第1節では、そうしたチラシやニュースを通して、文化運動のおおきなうねりや、次第に行き詰まってゆく状況をご紹介します。

第2節では、庶民が親しめるイベントとしてたびたび企画された「プロレタリアの夕べ」に関するチラシをご紹介します。こうしたイベントでさえ警察への届け出が必要で、直前に禁止されることもしばしばでした。

第3節では、「ビラ」という空間でどのような工夫や駆け引きがおこなわれていたのかを見ていきます。ビラそのものが文化であり芸術だった、そんな気さえしてきます。

なお、「ビラ」と「チラシ」には明確な境界はありませんが、本展では宣伝・告知用の一枚ものの紙は内容にかかわらず「チラシ」と分類しています。一方、当時は、政治的な主張を含む内容で、街頭や工場の壁に貼られるものを「ポスター」、直接配布されるもの（撒かれるもの）を「ビラ」と称したようです。

（伊藤純・村田裕和）

第1節 波瀾万丈——文化運動盛衰史

1-1a



日本プロレタリア作家同盟創立大会招待状

1929年

大原 [0025]

2月、全日本無産者芸術聯盟（ナップ）は、文学部・演劇部・美術部・音楽部・出版部をそれぞれ独立させ、その連合体「全日本無産者芸術団体協議会」となった（略称はナップのまま）。文学部は独立して日本プロレタリア作家同盟が誕生した。



1-1b

日本プロレタリア作家同盟創立大会の光景（貴司山治撮影）

1929年

個人蔵

大会会場には200人以上が詰めかけ満員となった。会場を監視する臨席警官の姿も見える。撮影者の貴司山治（1899-1973）は、プロレタリア作家となる前から写真技術を習得しており、本展でも紹介する貴重な写真を数多く残した。



1-2a

小林多喜二『蟹工船』（戦旗社）

1929年

個人蔵（復刻版）

作家同盟ができた1929年、この同じ年に登場した二つの小説、小林多喜二『蟹工船』と徳永直『太陽のない街』は大きな評判を呼び、プロレタリア文学の代表作となった。一般の総合雑誌や文芸誌にもプロレタリア文学が進出した。



1-2b

徳永直『太陽のない街』（戦旗社）

1929年

個人蔵（復刻版）

東京小石川区の共同印刷でおきた大規模なストライキ（共同印刷争議）がモデル。印刷工として働いていた徳永直（1899～1958）はこの体験をスリリングに描き、プロレタリア作家デビューをはたした。



1-3

左翼劇場 第14回公演『太陽のない街』（チラシ）

1930年

札大 [0704]

徳永直の長編小説『太陽のない街』は、左翼劇場（村山知義演出）によって舞台化されて大当たりとなり、翌3月にも再演されてふたたび満員となった。

1-4

左翼劇場 第14回公演 「太陽のない街」（プログラム）と大入袋

1930年

札大 [0703]

出演者の成田梅吉宛の大入り袋が貼られたプログラム。別に残され



たものとあわせると最終日以外のすべての「大入袋」が確認できる。運動全盛期の高揚感があふれている。



1-5a
左翼劇場 九州若松
公演『太陽のない街』
(チラシ)
1931年
札大 [0931]

前年の関西公演につづく左翼劇場の大規模な地方公演。6月14日、15日には博多で約3000人を動員した。しかしこの若松公演（19日）は地元暴力団の猛烈な妨害を受け中止となった。



1-5b
左翼劇場 九州若松
公演『太陽のない街』
暴力事件内容メモ第
4報

1931年
札大 [0931]

襲撃によって負傷した劇団員たちが街を出ていく状況が、チラシの裏に手書きでメモされている。何枚かに分かれ欠落があるが、「……沖仲仕組員二十名程、若松警察署高等係数名の警備の中に、額、顔、腕、足等に繃帯をほどこした劇団員が市中を、八幡への連絡船の方へ向かって行くと、市内にブラ／＼してある妙ないでたちのゴロツキが、バリザンボウをあびせかけました。……若松公演は遂に十九日は中止の止むなきにいたり……」とある。包帯を巻いて引きあげる劇団員に「ゴロツキ」が罵声を浴びせるというただならぬ情景が活写されている。



1-6a
作家同盟 第6回大会中央委員会報告
1933年
小樽 [0168]

大きな注目を集めたプロレタリア文化運動は、1930年代になると、社会主義を目指す革命運動に従属すべきだという意見が強くなり、その文書類には生硬な政治用語ばかりが溢れかえるようになる。



1-6b
作家同盟 第6回大会中央委員会報告
1933年
小樽 [0168]

厳しい弾圧も「資本主義の一般的危機」の表れで、むしろ革命の必然性は高まっていると認識された。これが「文学」団体の報告書であることに驚く。プロレタリア文学運動とはいったい何だったのだろうか？

第六回大会中央委員会報告 一九三三年六月十一日（日曜）午前十時於・築地小劇場

国際革命作家同盟（モルプ）日本支部 日本プロレタリア作家同盟（略称ナルプ）

〔略〕一九三二年から今日に到る期間を特徴づけるものは、国際的、国内的情勢の異常なる変化である。資本主義の一般的危機の激化と社会主義的工業化、共産化及び文化革命の大綱領を巨人的テンポを以て遂行しつつあるソヴェート同盟にあって、階級の最後の精算と、国の全勤労人口を階級なき社会主義の意識的・積極的建設者へ転化する事を目標とする第二次五か年計画が開始され、社会主義的世界革命の根拠地としての国際的威力が万国の労働者農民勤労階級に確固たる道標と自信を与えつつある。

〔略〕他方、資本主義世界に於いては、経済恐慌は益々激化し関税壁、輸入割当政策、自給自足政策等によって祖国資本を救済せんとする国粹主義、排外主義の必死的努力にも拘わらず、不断に成長しつつある世界経済恐慌は生産の可能性と資本主義の一般的危機の条件下に於て、すでに狭隘化した市場間に対立の極度の激化を導いた。



1-7

ナルプ解体の声明

1934年

浦西 [0193]

2月、ついに作家同盟（ナルプ）は解散し声明を發した。鹿地^{かじ}
^{わたる}巨（1903 ~ 1982）

が書いたとされるその声明文を意識すれば、「会費も払ってくれない、通信もよこさない」と、精一杯のボヤキが率直にかかっている。作家たちに見捨てられた組織だけが最後に残っていた。

第2節 プロレタリアの夕べ



1-8a

プロレタリア文学の夕（チラシ）

1931年

札大 [0075]

11月28日、大阪・天王寺公会堂。この日、^{ほそだけんきち}細田源吉（1891 ~ 1974）が講演中止となり、^{かじ}貴司山治・^{ほそだたみき}細田民樹（1892 ~ 1972）・^{いのしやうぞう}猪野省三（1905 ~ 85）ら8名が逮捕された。



1-8b

プロレタリア文学の夕（チラシ） 一部拡大

1931年

札大 [0075]

アジテーション（扇動）、プロパガンダ（宣伝）から取られた「アジ太」「プロ吉」は、革命道中を案内するおなじみのキャラクター。



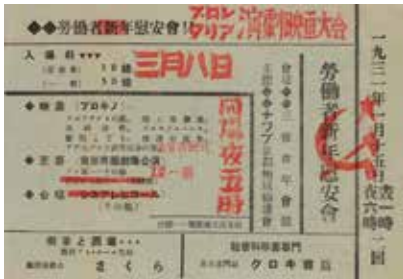
1-9

同志劇場公演文戦劇場助演「プロレタリアの夕」於愛隣団（チラシ）

1931年

大原 [0949]

8月17日、東京・日暮里愛隣団。当時、劣勢だった「文戦派」の手作り感のあるチラシ。左に「関東合同・日暮里石塚争議団への応援を兼ねてやることになった」とペン書きされている。



1-10

労働者新年慰安会 プロレタリア演劇映画大会（チラシ）

1931年

大原 [1938]

1月15日のチラシを流用し、3月8日のイベントを朱色で告知。1929年3月5日に暗殺された「山宣」こと山本宣治（やまもとせんじ1889～1929）は、第1回普通選挙で当選した代議士。その告別式の模様を記録したのが上映展示中の『山本宣治告別式』である。

1-11



救援の夕べ催しに就て労働者農民並に一般市民諸君へ！ 構成劇場公演『疵だらけのお秋』ほか（チラシ）

1932年

札大 [2796]

北海道・東北地方を救うために連帯が呼びかけられた。しかし、禁止に。「手續上ノ疎誤ヲ来シ遂ニ当局ヨリ禁止ヲ命ゼラル」とガリ版で上摺りされている。悔しさのにじむ1枚。3-3参照。

第3節 ビラという「文化」



1-12

総選挙ポスター・ビラの送付御依頼について

1928年

大原 [2001]

プロレタリア芸術聯盟福岡支部が労農党福岡支部と共催で「総選挙ポスター・ビラ展覧会」を企画した。ポスターやビラは使い捨てではなく、文化的闘争のための武器として認識され始めた。



1-13

「総選挙ビラ・ポスター展」開催について

1928年

大原 [2002]

初の普通選挙は、2月20日投票。466議席が争われ、労農党などの無産政党は8議席を獲得した。19日付の本資料は、選挙後を見据えてビラ・ポスターで戦いを振り返ろうとしている。



1-14a

労農斗争用カット・漫画集 第1輯 市会選挙斗争号

1929年

大原 [2014]

謄写版（ガリ版）によるニュースやビラの中にこのカット集を「充分活用」し、「諸君の斗争に利用して下さい」と訴えている。著作権フリー・改変自由のカット集。



1-14b

労農斗争用カット・漫画集 第1輯 市会選挙斗争号（6～7頁）

1929年

大原 [2014]

獄中の同志を支援する「救援ニュース」や、治安維持法反対、戦争反対など、さまざまな用途を想定したカットが並ぶ。右中央に「自衛隊」とあるのは労働者農民の「自衛」を意味し、現在とはまったく異なる用法。



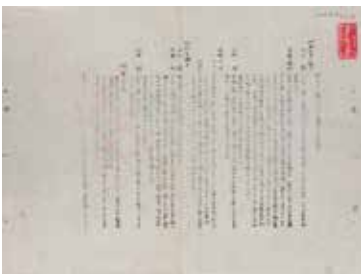
1-15

プロレタリア演劇・映画資料展（チラシ）

1931年

札大 [1984]

関西の文化運動を牽引した戦旗座による「資料展」。「デンタン」とあるのは伝単（チラシ）のこと。資料総計500余点とあり、2019年のこの企画展をはるかにしのぐ規模。



1-16

ポスター貼り・ビラ撒きの注意

1932年

大原 [2214]

ポスターの貼り方。ノリつけ、貼り、見張り（ピケ）の3人一組が理想。柔らかく溶いたノリを布袋に入れて壁にたたきつけ、表を内側に巻いたポスターを転がすように素早く貼り付けろ！



1-17

愛国勤労大衆ノ圧力ヲ以ツテ共産党エンゲキ同盟ヲ徹底的にタタキツブセ！ 非常時日本ダ！

1933年

大原 [2530]

2月28日、大阪中央公会堂での左翼劇場・新築地劇団共同公演『機関庫』が右翼団体の妨害で混乱。中止・解散を命ぜられた。これはその右翼団体側のビラ。暴力的乱入者もビラはしっかり準備したのだ。



1-18a

『前線 第二文戦打倒同盟機関誌』第1巻第2号 7.8月合併号

1931年

大原 [2411]

当時、多喜二らのナップ派と対立した文戦派は、内紛で脱退者が続出。その脱退者による雑誌が『前線』。彼らはその後、ナップに走った。1-18b、2-6の文章などが収録されている。

1-18b

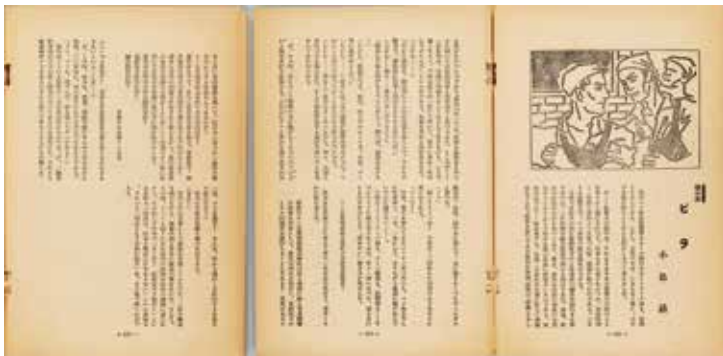
小島勲「ビラ」(『前線』第1巻第2号、所収)

1-15a 参照

1931年

大原 [2411]

工場の窓から投げ込まれたビラには、組合幹部の墮落を暴露し、従業員を結束を呼びかける言葉が……。ビラの役割を分かりやすく解説した壁小説である。壁小説そのものがビラ的機動性と宣伝効果を意図して生まれた。



第2章 メディアの中の小林多喜二

小林多喜二(1903～33)の名は、現在においてもプロレタリア文化運動の象徴として特別な意味合いを持っています。その背景には、「工場細胞」や「オルグ」、「党生活者」などで描かれた非合法共産党員の活動が、地下に潜伏しながら活動した多喜二本人の姿と重ね合わせられて読まれたということがあります。そして、その非業の死がマスメディアで大きく報道されたこととあいまって、多喜二の名は単なる売れっ子作家から、プロレタリア文化運動の理念そのものを体現する存在へと転換していくこととなります。

第一節では生前の小説や演劇、チラシや雑誌広告など、各種メディアの中で多喜二という存在がどのように受容されていったのかを提示します。そこから浮かび上がってくるのは、多喜二という作家自体が異なるジャンルの文化形式を結び付けるメディアとして機能していく過程です。

第二節では、その死後に「小林多喜二」という名が作者自身の肉体を離れ、運動の中である種の記号として機能していく過程を見ていきたいと思えます。そしてその過程で、多喜二の名は象徴として運動に携わる者たちを鼓舞すると同時に、時としてある種の到達すべき規範としても作家たちに大きな影響を与えていくこととなります。

「多喜二」という記号が大衆メディアの中で消費されつつある現在、改めてメディアの中の／メディアとしての多喜二の姿を通してプロレタリア文学に触れることの意味を考えてみたいと思えます。

(鳥木圭太・内藤由直・木村政樹)

第1節 メディアの中の多喜二



2-1

新築地劇団第3回帝劇公演『宣伝』『蟹工船』改題『北緯50度以北』
(パンフレット)

1929年

浦西 [0618]

「蟹工船」を改題した作品「北緯50度以北」のパンフレット。高田保・北村小松によって増補脚色された。肉体労働者の過酷な状況はもちろんのこと、漁撈会社の側についても問題化することが目論まれている。



2-2

左翼劇場第17回公演『不在地主』(チラシ)

1930年

札大 [0812]

「見よ！北海道の戦闘的労働者農民諸君の姿を！！」小林多喜二原作「不在地主」の公演チラシでは、北海道の人々の勇敢な姿が強調されている。公演は、江戸三座の一つとして有名な芝居小屋である市村座で行われた。



2-3

左翼劇場第17回公演『不在地主』労働者券

1930年

札大 [0811]

労働者券を使用すれば格安の料金で入場できた。労働者を動員、または新規獲得するための労働者券は、企業の労働組合等の組織を通じて配布された。同時代の歌舞伎座の観覧料（1929年の正月興行）は5円30銭であった。



2-4

小林多喜二『オルグ』『日本プロレタリア詩集 1931年版』(広告)

1931年

大原 [0067]

「広告」というメディアに現れた多喜二の書物。プロレタリア文学の力強いイメージが鮮やかに示されている。タイトルである「オルグ」の三字のなかに、「小林多喜二」「五十銭」と書かれている。「オルグ」はオルガナイザーの略で、大衆の中で宣伝・勧誘活動をする人やそうした行為を意味する。



2-5a

総合プロレタリア芸術講座 (内容見本)

1931年

個人蔵

ナップの作家・批評家協力のもと企画された講座の内容見本。「現在に於ける最高唯一の芸術教科書であり、移動大学である」と、その特色が説明されている。全12巻の予定であったが、第5巻までの刊行で終わった。



2-5b

小林多喜二「良き教師」

1931年

浦西 [0078]

プロレタリア芸術は「北国の熊のようにあらわれ」と形容されている。多喜二が寄せたこの推薦文では、労働者芸術家を「雲の如くに」輩出していくためには、本書のような「良き教師」が必要であると記されている。

2-6



小林多喜二「文戦の打倒について」(『前線』第1巻第2号、所収 29～31頁)

1931年

大原 [2411]

文戦に入れば市ヶ谷監獄には送らない、という意味の特高の言葉が最後に紹介されている。多喜二は、文戦派への一面的な非難に待ったをかけたつも、文戦派と闘うナツプ派という対立構図そのものは強化していった。(1-15a参照)

第2節 運動の象徴として

2-7



眠る多喜二 (貴司山治撮影)

1933年

個人蔵

1933年2月20日、多喜二は逮捕され、特高刑事に虐殺された。今回新たに発見されたガラス乾板から86年ぶりに姿をあらわした多喜二。『大衆の友』号外(2-14)や共産党機関紙『赤旗』第122号に掲載された写真のオリジナルであると考えられる。眠るように横たわる顔には傷跡が残る。



2-8

大阪ノ旗 第2巻第2号(3・4月合併号)同志小林多喜二追悼号

1933年

浦西 [0163]

多喜二没後、権力への強い怒りとともに、この追悼号が刊行された。「日本プロレタリア作家同盟大阪支部」の名で「同志小林多喜二虐殺に抗議す」が収められている。



2-9

『小林多喜二全集』刊行趣意書

1933年

大原 [0171]

『小林多喜二全集』刊行趣意書では、多喜二全集の意義が強くアピールされている。全10巻、各冊50銭とあるほか、「誠意ある完全な大衆廉価版」「即刻前金で申込み！」の文言がある。



2-10

マルクス五十年祭、故小林多喜二記念公演『沼尻村』（プログラム）

1933年

札大 [1307]

築地小劇場にて、1933年3月15日～26日の公演予定だったが中止となった。パンフに掲載されている「同志 小林多喜二の歌」（作詞：佐野^{さの}たけお、作曲：吉田^{よしだ}隆子^{たかこ}）は3月15日の労農葬で合唱される予定であった。



2-11

小説家小林多喜二はどんな人か — 3月15日午後3時から築地小劇場で労働者農民葬が行はれる—

1933年

小樽 [2539]

コップ東京地方協議会発行。労働者に向けて多喜二の業績を簡明な言葉で説明したビラ。「日本プロレタリア作家同盟にあれば、小林多喜二のことやその他色んなことを知らせてあげます」と読者の勧誘も忘れない。



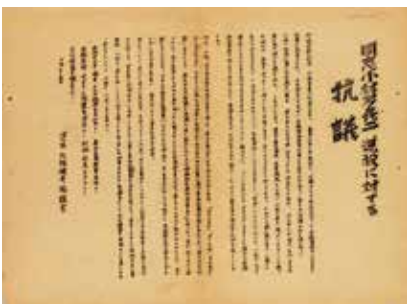
2-12

同志小林の虐殺に抗議せよ！！（チラシ）

1933年

大原 [2528]

多喜二の身体に残された暴力の痕跡を克明に記録し、多喜二の死が虐殺であることを告発するチラシ。「只一途に嘆き悲しむことは同志小林の死を弔う真実の道ではない」とコップ同盟員の怒りに訴える檄文。



2-13

同志小林多喜二逆殺に対する抗議

1933年

大原 [2529]

コップ大阪地方協議会による、多喜二虐殺への抗議。「小林よ、犬死にはさせぬぞ」の一文が目をひく。多喜二の死の意味づけにかかわって、未来を展望しながら現状を変革することが志向される。



2-14

大衆の友 小林多喜二記念号外

1933年

個人蔵（復刻）

3月15日の労農葬の開催を告知する号外記事。3面に自宅に戻った多喜二の遺骸を迎えた人々の様子を伝える窪川いね子（1904～98）の報告文学「屍の上に」や、4面に多喜二とプロットとの結びつきを伝える「プロットと同志」を掲載。



2-15

恨みに燃ゆる三月十五日！ 同志小林多喜二の労農葬に参加せよ！ 午後七時天王寺公会堂に集れ！

1933年

大原 [2538]

多喜二の死は、拷問によるものであることが明白だと主張。多喜二の虐殺を、日本共産党などの組織への「弾圧の極悪的表れ」として把握しつつ、多喜二の労農葬への参加を呼びかけている。



2-16

同志小林多喜二労働者農民葬を吾々は如何に闘つたか！！

1933年

大原 [2540]

プロレタリア演劇同盟による、多喜二虐殺から3月15日労農葬に至る活動の報告。活動の不活発に対する自己批判や、労農葬同日に公演が予定されていた新築地劇団「沼尻村」公演中止の経緯の説明など。



2-17

コップ号外 十一月七日をめざす斗争方針書、大衆的活動の上に小林全集刊行を準備せよ！コップ各同盟に革命闘争を提唱する十月七日渡政メーデーめがけて、規律に関する決定

1933年

浦西 [2556]

コップの組織拡大に向けた方針書。当時の左翼運動は到達目標とそこに至る期間を設定する所謂「カンパニア」（大衆動員）闘争を掲げていたが、そこに多喜二全集刊行に向けた寄付金徴収が設定されている点が興味深い。



2-18

貴司山治日記

1934年

『貴司山治全日記 [DVD版]』（不二出版、

2011年) 所収

3月26日。貴司山治は、小林多喜二が虐殺される10日程前に会っている。日記には、貴司が多喜二に呼び出された際、多喜二から、組織内で権勢を振るう鹿地亘らに対抗するよう依頼されたことが記されている。



2-19

貴司山治原稿「子」

1933年

徳島県立文学書道館

雑誌『改造』8月号に掲載。多喜二虐殺をいち早く小説にした作品である。多喜二は「成田」という名で登場する。「二月二日昼、成田捕まる。即日虐殺、築地署。」の箇所は、雑誌では「二十二字除」として削除された。



2-20

佐多稲子『歯車』(筑摩書房)

1959年

個人蔵

非合法活動時代を描いた佐多稲子さたいねこ(窪川いね子)の小説。多喜二は小泉多嘉志の名で登場する。主人公明子(佐多)と連絡を取り合う小泉の姿や、多喜二の遺体が家に帰った際の様子^が明子の視点を通して描かれる。

第3章 大衆を動員せよ！—プロレタリア演劇運動—

1929年に結成された日本プロレタリア劇場同盟(後に、「日本プロレタリア演劇同盟」に改称、略称プロット)の核となった劇団は、東京左翼劇場でした。村山知義『暴力団記(全線)』などの創作戯曲に加え、徳永直「太陽のない街」、小林多喜二「不在地主」といった小説の舞台化、ゴーリキー『母』などの翻訳作品も上演されました。これらの作品に共通するのは、労働者を闘争へと駆り立てる、労働者のための演劇だということです。そのため、警察組織からの厳しい弾圧を受け、演劇人たちは検閲や上演禁止の命令に悩まされながら活動を続けました。

第1節では、東京左翼劇場だけでなく「地方」の劇団の活動も取り上げ、プロレタリア演劇運動の広がりについて紹介します。また、プロレタリア演劇は新劇だけにとどまりません。歌舞伎やレビューといった新劇の隣接領域との関係を示す資料も残されています。さらに、観客組織や移動演劇がどのように展開されたのかをご覧ください。

第2節では、プロレタリア演劇運動の“その後”を取り上げます。たびたび弾圧を受けていたプロットは、1934年に解散を余儀なくされます。力を失っていく各劇団の状況を憂慮した村山知義は「新劇団大同団結の提唱」を掲げ、新協劇団を結成しました。プロット時代から活動する新築地劇団と競合しながら、「新協・新築地時代」という一時代を築いていきます。新協・新築地のポスター、プログラム、機関紙などを通して両劇団の活動を紹介します。

(鴨川都美・正木喜勝)

第1節 プロレタリア演劇の広がり



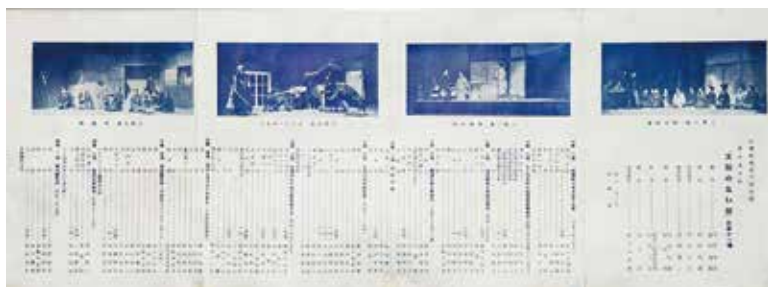
3-1

左翼劇場 第12回公演『全線』(チラシ)

1929年

札大 [0605]

『全線』の脚本は村山知義、演出は佐野碩^{さのせき}(1905-66)。中国の京漢鉄道ストライキに対する武力弾圧(二・七事件)を描いたもので、プロレタリア演劇の代表作と評価された。原題は『暴力団記』だったが、検閲でやむなく改題された。



3-2

左翼劇場 第15回公演『太陽のない街』(プログラム)

1930年

札大 [0723]

1930年2月の初演が人気を呼び、翌3月に再演された。これは再演のプログラムで、舞台

写真は初演のものと思われる。プログラムに舞台写真が掲載されるのは珍しく、当時の上演の様子を伝える貴重な資料といえる。



3-3

遠隔の地にひとり戦ひつゝある同志を見殺しにするな！(ビラ)

1927年

大原 [2267]

函館・小樽・札幌・旭川・名寄の巡回公演に出発した在京劇団「プロレタリア劇場」は、北海道へ到着後、道庁より上演禁止処分を受けた。劇団が所属する日本プロレタリア芸術連盟はこれに抗議し、仲間にカンパを求めた。



3-4

日本プロレタリア劇場同盟 東京左翼劇場 関西第1回公演『母』(プログラム)

1929年

札大 [0643]

在京劇団「左翼劇場」は関西初公演として『全線』を準備したが大阪府の許可を得られず、ゴーリキー原作『母』に演目を変更した。京都・大阪の劇団もこの公演に参加し、「中央」と「地方」の連携が図られることになった。



3-5

プロットニュース 第4号

1931年

浦西 [1018]

プロットは「日本プロレタリア演劇同盟」の略称で、これは加盟劇団の活動を報告するものである。右上、日本列島の星印は加盟劇団の所在地。プロレタリア演劇運動が組織的に展開されていたことを示している。



3-6

前進座第1回公演予告『歌舞伎王国』『とびっちょ』『大岡政談白粉のあと』(チラシ)

1931年

浦西 [0923]

プロレタリア演劇の波は歌舞伎にも広がり、現在も続く劇団「前進座」を誕生させた。大部屋俳優の減給問題や歌舞伎界の内情を暴露する『歌舞伎王国』は、外山俊平という変名を用いた村山知義によって書き下ろされた。



3-7

プロレタリア音楽とレビューの夕べ (チラシ)

1931年

大原 [2414]

プロレタリア演劇はいわゆる「演劇」の枠にとどまらず、音楽、新内節、レビューなど、多様なジャンルの芸能を取り込もうとした。会場の天六は大阪の天神橋筋6丁目のことで、北市民館は公設のセツルメント（福祉施設）だった。



3-8

左翼劇場 ドラマリーグに参加せよ！ (チラシ)

1932-33年頃

札大 [1860]

プロレタリア演劇にとって、労働者の観客を組織することは重要な課題だった。この「ドラマ・リーグ」は、戦後日本各地で組織された労演（勤労者演劇協議会＝新劇の公演を支える演劇鑑賞団体）を先取りするものだったと言える。



3-9a

メザマシ隊パンフレット 第1号

1932年

浦西 [1111]

メザマシ隊は派遣タイプのプロレタリア劇団で、労働者の求めに応じてその職場などに赴き、さまざまなパフォーマンスを行った。また、プラカードに書かれているように、労働者みずから演劇をつくれるように指導もした。



3-9b

メザマシ隊公演『赤いやつとこ』（プログラム）

1932年

札大 [1141]

『赤いやつとこ』という労働者新聞を弾圧から守れと訴える劇。「やつとこ」とは物を挟む工具のことで、新聞が会社の不正をつかみ出すことからこう自称した。欧文は「アジプロ隊は突撃作業隊である」と書かれている。

第2節 新協劇団と新築地劇団



3-10

新協劇団創設第1回公演『夜明け前』（ポスター）

1934年

札大 [1482]

弱体化していく新劇団を集め単一劇団をつくるという「新劇団大同団結の提唱」の結果、1934年9月に新協劇団が結成された。旗揚げ公演には、当時『中央公論』誌上で連載中だった島崎藤村（しまざきとうそん）『夜明け前』が選ばれた。



3-11

新協劇団第1回公演『夜明け前』（プログラム）

1934年

札大 [1483]

村山知義の脚色、久保栄（くぼさかえ）（1900～58）の演出、伊藤熹朔（いとうきさく）（1899～1967）の装置で上演された『夜明け前 第一部』は評判を呼び、1936年3月には、第二部が上演された。第二部を観劇した島崎藤村は「誇張がなく、大変結構です」と評している。



3-12

新協劇団5周年記念公演『石狩川』（パンフレット）

1934年

札大 [1486]

旧藩主が故郷を追われ、石狩平野で開拓の民とし

て奮闘する『石狩川』（ほんじょうむつお 本庄 陸男（1905～39）原作）は、明治の世に翻弄されながらも生きようともがく人間の姿が描かれている。新時代の到来を信じ続けた村山の想いが汲み取れる。



3-13

新協劇団『火山灰地』（プログラム）

1938年

札大 [1791]

新協劇団の代表作である『火山灰地』は、1938年6月が初演だが、長い時間をかけて完成した。1936年10月の『月刊新協劇団』では、札幌出身の久保栄が「執筆のため北海道石狩・十勝の農村を視察」したことが報じられている。



3-14

新築地グラフ 第6号

1936年

札大 [1677]

この時期、新協劇団と双璧をなしたのは新築地劇団である。『女人哀詞』は、新築地劇団の看板俳優・山本安英(1902 [1906?]~93)の復帰作となった。夫を亡くし、自身

も病に臥せた山本だが、「以前よりも演技に内容的に深みを加へ」（東京朝日新聞）たと激賞され、約2年のブランクを乗り越えた。



3-15

月刊新築地劇団 第18号 豊田正子「綴方教室」特集号

1938年

浦西 [1775]

舞台『綴方教室』は、新築地劇団にとって久々の大ヒット作となった。『月刊新築地劇団』第18号では、志賀直哉(1883~1971)や豊田正子(1922~2010)を指導した小学校教諭のおおきけんいちろう大木頭一郎らがコメントを寄せている。

3-16

新築地劇団『綴方教室』・映画『東洋平和の道』（パンフレット）

1938年

浦西 [1776]

新築地劇団が舞台化した『綴方教室』は、当時30歳を超えていた山本安英が12歳の豊田正子(左下写真)を演じ、好評を博した。また、新聞社への売り込みを精力的に行った結果、観客動員数は12000名を超え、翌月には別の劇場で再演された。



3-17

素顔 山本安英後援会誌 第1巻第1号

1938年

浦西 [1773]

新協劇団・新築地劇団ともに劇団後援会を東京や地方に有していたが、俳優個人の後援会活動も盛んに行われていた。山本安英の後援会誌では、山本の「素顔」について、藤森成吉(1892~1977)や秋田雨雀(1883~1962)らが寄稿している。



3-18

月刊新協劇団 第21号

1937年

大原 [1697]

「旅の写真帖」では、俳優の瀧澤修^{たきざわおさむ}（1906～2000）が地方公演での劇団員の姿を写真付きで紹介している。1頁目の「「どん底」関西公演」に使用された写真の撮影場所は1930年に開館した倉敷の大原美術館である。



3-19

月刊新協劇団 44号

1938年

浦西 [1797]

俳優の宇野重吉^{うのじゅうきち}（1914～88）の応召を契機に、劇団員の消息欄を設け戦地の様子を紹介していくことになる。また、宇野の劇団復帰後には、慰問公演を行うなど、国策に協力的な立場を取らざるを得ない状況がうかがえる。



3-20

月刊新協劇団 第66号臨時号

1940年

札大 [1868]

皇紀二千六百年奉祝芸能祭参加作品である『大仏開眼』は、演出家の伊藤道郎をアメリカから招聘し、大々的な宣伝を打って上演された。だが、村山らの改訂が仇となり、同年8月に劇団は強制解散へと追い込まれる。

第4章 赤い筆—プロレタリア美術運動—

プロレタリア美術運動は、1930年前後の若い美術家たちを熱狂させ、続く世代に大きな影響を与えたにもかかわらず、日本美術史の中であまり注目されません。それは、イデオロギーのためだけでなく、美術館に展示するような大作の絵画がほとんど現存していないためでもあるでしょう。

この運動の中でも、最初から複製を前提とした漫画やグラフィックデザインは、雑誌や新聞などを飾り、今日に伝えられています。一方、その絵画は、大画面の群像表現を特色としていたにもかかわらず、弾圧によってほとんど破壊されて小品しか残らず、一部が雑誌のグラビアページや絵はがき（マップ）として見られるだけです。

近年確認されたのですが、ロシアのエルミタージュ美術館が、日本のプロレタリア美術を所蔵していました。1929年にソ連に送られたもので、その中には傑作というべき大作の絵画も含まれています。いずれそうした作品が日本で里帰り公開されたら、イデオロギーを超えて、大きな話題を呼ぶでしょう。もっともそのような未来を待つまでもなく、今、私たちは、残された資料やモノクロ図版をつうじて、この運動の光景を視覚的に想像することができます。

この章では、まずはプロレタリア美術の前史というべき、大正時代のアナキズム芸術運動や新興美術運動の資料から始まり、次いで旧来の美術の枠組みを超えて社会に関わろうとした昭和のプロレタリア美術の資料をご覧ください。

(足立元)

第1節 前史——アナキズムの美術運動

4-1



黒耀会主催第2回作品展覧会 (チラシ)

1920年

大原 [1994]

黒耀会は、1919年末にアナキスト画家の望月桂^{もちつきかつら} (1887～1975) が結成した。美術のジャンルや上手下手を超えて平等に、対社会的な表現を目指していた。よりよく生きることを謳う宣言文も魅力的だ。目録には、添田啞蟬坊^{そえだ あぜんぼう} (1872～1944)、大杉栄^{おおすぎさかえ} (1885～1923)、堺利彦^{さかいとしひこ} (1871～1933) などの名前も並ぶ。

4-2



マヴォの宣言

1923年

札大 [1995]

マヴォは、1923年に村山知義^{やな せ まさむ}、柳瀬正夢 (1900-1945) らが結成した。美術、文学、演劇、建築を越境した活動によって注目を集め、また、アナキズムであり共産主義でもある未分化で過激な思想によって自壊した。本資料の見所は「私達は尖端に立つてゐる」という若々しさだ。

4-3



マヴォ演劇展覧会 (チラシ)

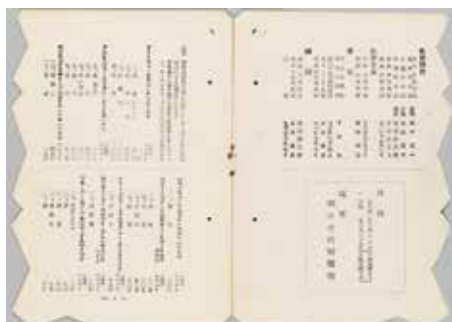
1926年

札大 [1998]

マヴォは1925年に三科の分裂とともにほぼ活動停止したが、岡田龍夫^{おか だ たつ お} (1904～没年不詳) らはその存続を図っていた。『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会)によると、この展覧会には、岡田や吉田謙吉^{よし た けんきち} (1897～1982) らによる舞台美術の模型、高見沢路直^{たか み ざわみちなお} (1899～1989：後の田河水泡^{た がわすいほう}) による舞台衣装などが並んでいた。

第2節 ロシアへの憧れ

4-4



新ロシア美術展覧会 目録

1927年

大原 [1999]

この展覧会は、銀座に出来たばかりの朝日新聞社屋で、同時代ソ連の美術品約400点を紹介した。リアリズム絵画が中心で、日本のプロレタリア美術の登場に影響を与えたとされるが、目録を見ると縁をギザギザに切った装丁など、洒落たイメージもうかがえる。



4-5

革命十周年記念祭 労農ロシヤ展覧会

1927年

札大 [2000]

ロシア革命から10周年を祝う展覧会。出品内容を見ると、ソ連の政治組織図解から始まり、統計、ポスター、新聞記事が多く、美術は最後に付け足したような扱いである。無産者新聞社芸術部作品として柳瀬正夢の漫画が並んだのであろう。

第3節 運動の始まり



4-6

御案内

1928年

大原 [2003]

東京府美術館における第1回プロレタリア美術展（以下プロ美展）の開催を告げる案内文。ブルジョア美術への対抗意識から、全日本無産者芸術聯盟（ナツプ）と造型美術家協会などが統一して、闘争することを目指すことを述べる。

4-7

プロレタリア美術大展覧会目録

1928年

浦西 [2004]



この展覧会には10日間で約3千人が訪れ、出品作181点のうち19点が撤回処分に遭ったと伝えられる。プロレタリア文化運動の理論的指導者・蔵原惟人（くらはらこれひと）（1902～99）は「明るい健康さ」「リアリズム」「テーマ」という観点から、この展覧会を評価していた。

4-8



柳瀬正夢作品頒布会 (案内)

1929年

大原 [2018]

柳瀬正夢は、プロレタリア漫画のリーダー格だったが、上野のプロ美展には一度も出品しなかった。おそらく、複製芸術によって闘争することと美術展は相容れないと考えていたのだろう。この頒布会の後援者名には、長谷川如是閑 (1875～1969)、河上肇 (1879～1946) など、一流の知識人たちが並ぶ。



4-9

第1回プロレタリア美術移動展 会員券

1929年

大原 [2020]

プロレタリア美術運動では、上野で年に1度の大型展を行うだけでなく、都市や農村に出かけて移動展を行った。移動展の一つ一つは小さな規模だが、その総数を推計すると、上野の展覧会よりも多い入場者数を集めていた可能性がある。



4-10

PP NEWS (日本プロレタリア美術家同盟本部ニュース) 第2号

1929年

小樽 [2023]

プロレタリア美術運動では、内部向けの雑誌が盛んに作られていた。そこには教条的・戦闘的なスローガンばかりでなく、しばしば自己批判も現れ、彼らの悩みも垣間見える。この資料では北海道の札幌・小樽・釧路に支部があったことが分かる。



4-11

プロレタリア美術大展览会 製作方針

1929年

小樽 [2028]

第2回プロ美展に向けた内部向けの資料である。この頃、プロレタリア美術家同盟 (P・P) が組織された。この資料では組織としての統一的な方針を示す。だが、そこに果たして本質的な表現の革新はあっただろうか。

第4節 運動の可能性と隘路

4-12



プロ展 労働者券

1930年

大原 [2035]

プロ美展では、一般と区別して労働者券を用意し、労働者の入場者数を集計していた。さらに、アンケートなどによって労働者の素人的で忌憚のない声を集め、美術家たちはそれを重要な美術批評として受け止めていた。



4-13

第3回プロレタリア美術大展覧会（チラシ）

1930年

札大 [2036]

手書きの謄写版チラシは、経済的な厳しさを反映している。この第3回プロ美展から会場を上野の日本美術協会に移した。だが、小説家の中條（宮本）百合子（1899～1951）は「この会場に漲る活気と画題のまやかしでない現実性」を称えていた。



4-14

第4回プロレタリア美術大展覧会（チラシ）

1932年

札大 [2070]

第4回プロ美展は、1931年11月に東京で開催され、翌32年に大坂へ巡廻した。東京では弾圧によって打撃を受けていたが、大坂では「凡そ絵なんか嫌ひやと云ふもんでも、プロ展なら好きになる筈だ」と関西弁で意気軒昂である。



4-15

（本部ニュース第26号附録）第4回大会の時期決定と各支部・支準の緊急任務

1932年

小樽 [2072]

この文書は、P・P全国各地の支部に向けて、第4回全国大会をメーデーの後に挙げる旨を告知する。内容は、「～しろ」「ねばならぬ」が続くが、最後の頁に、朝鮮、台湾、中国の革命擁護、植民地の再分割を目指すことも記されている。



4-16

東京プロレタリア美術学校開校紀年第6回プロレタリア美術研究所制作展覧会（チラシ）

1932年

札大 [2073]

プロレタリア美術学校は、P・Pによる労働者向けの画塾で、黒澤明（1910～98）もここで学んだ。新宿紀伊国屋で2日間の卒業制作展を行っていた。案内文を読むと、力強い言葉の陰に、悲しげで弱々しい実態もうかがえるが、今ではそれもまた魅力ではないだろうか。



4-17

붉은주먹 [赤い拳]（ニュース）

1932年

大原 [2074]

最上行にはハンゲルで「★万国の労働者よ、団結せよ！★」と記される。誌面には漫画だけでなく「集会やピクニックにいつでも出勤を準備しながら待っている。三一劇場移動隊を利用しよう」とあり、朝鮮人の文化運動が領域横断的であったことが伝わる。



4-18

PP 大会準備号 日本プロレタリア美術家同盟東京支部ニュース

1932 年

小樽 [2075]

第 4 回全国大会のための資料。10 頁から始まる教育部からの報告によると、この中にはいくつもの研究班が組織され、油絵、印刷など一般的なもののばかりでなく、建築、朝鮮、農民、少年といった、独特の活動を想像させる研究班があった。



4-19

YAP 東京支部ニュース 革命競争を青年デーへ 更に革命記念日へ

1932 年

小樽 [2079]

この文書では、最終頁のあとがき部分から当時の実態がうかがえる。警察は次々と仲間の美術家を検束していった。プロレタリア美術学校は、「非常に沈滞して」いた。指導者たちが唱える革命競争は延期された。組織の限界は誰の目にも明らかだっただろう。



4-20

国恥日（8月29日）大×殺（9月1日）記念日を朝鮮（殖民地）委員会確立の斗争に組織せよ！

1932 年

小樽 [2080]

この文書では、1910 年 8 月 29 日の朝鮮併合、および 1923 年 9 月 1 日の関東大震災における朝鮮人虐殺を記念日として、P・P における朝鮮委員会の闘争を呼びかける。P・P の朝鮮人美術家については分からないことが多い。



4-21

東京プロレタリア美術学校 投書用紙

1932 年

札大 [2085]

意見箱に疑問や不満などを記してこの紙を入れていたのだろうか。プロレタリア美術学校は、実技では人物や工場の写生を行い、講義では西洋美術史、ソヴィエト美術史、唯物論、漫画が論じられるなど、先鋭的なカリキュラムを持っていた。



4-22

当面せる美術界の動向と我が同盟の任務

1932 年

小樽 [2096]

この文書によると、第 4 回全国大会は開催と同時に解散させられたようだ。プロレタリア美術運動の来し方を評価しつつ、満州事変以来のファシズムに対する反戦運動が立ち遅れていることを憂い、一層の組織的活動を訴えている。



4-23

新しい情勢と美術運動の新しい任務

1933年

小樽 [2086]

もはや、新しい美術で表現の世界を変えるよりも、工場や農村の労働者の中に左翼的な美術サークルを組織することで社会を変えることに力点が置かれるようになった。展覧会の弾圧や美術家の検束などが重なり、できることは少なくなっていた。



4-24

大月源二「走る男」(油彩画)

1936年

市立小樽美術館

おおつきげんじ
大月源二 (1904～71) は、函館生まれ、小樽育ち。1927年、東京美術学校を卒業し、プロレタリア美術運動に参加。山本宣治の葬送を描いた「告別」で知られる。1932年逮捕・起訴され、35年に転向し出獄したあと、本作を描いた。

第5章 運動の最前線 — 地方でたたかう人々 —

プロレタリア文化運動の理論は、中央団体のインテリたちによって提起されましたが、それらを実践したのは地方支部の人々でした。運動は全国へ展開し、各道府県に支部が設立されていきます。

1931年末の日本プロレタリア文化聯盟(コップ)の結成後、企業や農村で文化サークルを組織し、機関誌の購読者や組合員を増やすといった目標が掲げられると、地方支部の存在はより重視されました。プロレタリア文化運動を起源とする「サークル」という言葉は、現在では親睦団体を指す言葉として定着しています。しかし、官憲の眼を盗んで組織活動をした当時の地方支部の人々にとっては、サークル活動はまさに命がけのたたかいでした。

第1節では、作家同盟地方支部が発行した『ニュース』を通して、コップ結成後に展開された地方支部の活動状況をご紹介します。

第2節では、全国で多くの観客を動員した演劇『太陽のない街』の地方公演のチラシをご紹介します。共同印刷争議をモデルに労働者たちが立ち上がる姿に観客は感化されました。

第3節では、中央団体の作家たちが登壇した文芸講演会のチラシをご紹介します。地方支部にとって講演会は一大イベントであり、聴衆の中から多数の仲間を獲得する好機でもありました。

第4節では、謄写版(通称:ガリ版)で制作された戦旗社支局のビラをご紹介します。制作者の筆致を再現するこれらの文書からは、運動に携わった人々の息づかいが伝わってきます。

第5節および映像展示では、プロレタリア映画が制作され、各地で上映された模様をご紹介します。撮影で使われたのは小型カメラで、カメラを持って街頭に繰出し、闘争の武器としました。

(和田崇・池田啓悟・武田悠希・雨宮幸明)

第1節 運動の全国への広がり



5-1

作同山梨支部ニュース No.3

1932年

小樽 [0100]

末尾で「全農山梨県聯事務所」への移転を通知。山梨の文化運動は農民芸術が中心だった。発行人の古屋義三郎は、コップ山梨地方協議会の結成に向けて資金調達などをして準備を進めたが、結成には至らなかった。



5-2

日本プロレタリア作家同盟長野支部ニュース No.1

1932年

小樽 [0095]

作家のタカクラ・テル（1891～1986）がいた長野支部は、地方では関西に次ぐ運動の盛んな地域だった。しかし、4～5枚目で2人の責任者が消息不明となっていることが記されているように、地方のサークル活動ではメンバーの脱落も多く発生した。



5-3

京都支部ニュース No.1

1932年

小樽 [0092]

約1年間消滅していた京都支部は、1931年末の池田寿夫と貴司山治の来訪を期に再生する。しかし、1頁左下で同一事務所に複数の支部名が併記されているように、地方組織は少数のメンバーで運営され、見かけと実態はかけ離れていた。



5-4

岡山支部ニュース No.1

1932年

小樽 [0085]

「支部員・同盟員の倍加運動」といった威勢のよい言葉が並んでいる。しかし、2頁中段右の収支報告では、1ヶ月にわずか20銭（現在の500円程度）の収入しかなく、活動資金の調達に苦戦していた様子がうかがえる。



5-5

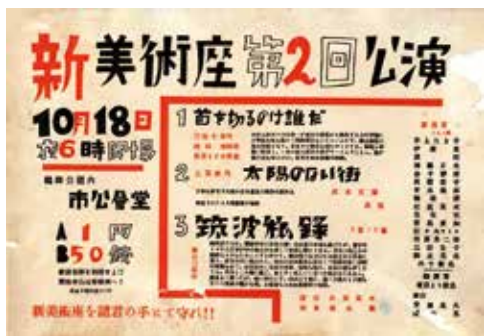
作家同盟大阪支部ニュース No.3

1933年

大原 [0155]

地方で最も規模が大きかった大阪支部も、当局の弾圧が激しくなると活動が停滞した。11頁から始まる児玉義夫の文では、機関誌代の滞納を「怠納」と表し糾弾しつつも、回収を迫る本部の「払込みの競争」が原因ともとれる認識が示されており、葛藤が見え隠れしている。

第2節 『太陽のない街』が町に来た！



5-6

新美術座第2回公演『首を切るものは誰だ』『太陽のない街』『筑波秘録』案内チラシ（チラシ）

1930年

札大 [0815]

30年3月に誕生した新美術座は、この後「前衛座」となりプロットに加盟する。ただしここでの『太陽のない街』は、演劇ではない。左翼新内を創始した岡本文弥（おかもとぶんや）（1895-1996）の十八番。新内は三味線で伴奏する語り芸。



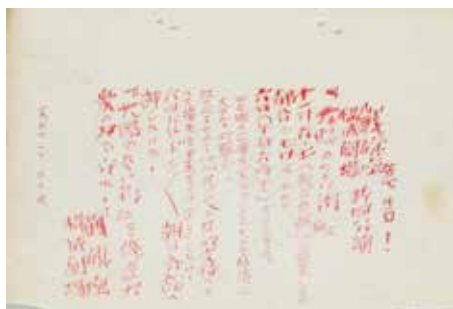
5-7

東京左翼劇場福岡公演『太陽のない街』『プロ裁判』（チラシ）

1931年

札大 [0929]

原作は共同印刷争議（1926年）の体験を徳永直が小説化したもの。当時、徳永は争議団の一人として、佐々木孝丸（ささき たかまる）（1898～1986）らに芝居による団員鼓舞を要請。これが左翼劇場の源流の一つとなった。本公演の結末は1-5で見たとおり。



5-8

急告！ 戦旗座・構成劇場共同公演『太陽のない街』（チラシ）

1931年

大原 [0980]

大阪の左翼劇団が力を合わせて『太陽のない街』公演を実現した。7日は警察に禁止されたのだろうか。「俺達大衆の力で守れ！」という呼びかけが裏の事情を物語る。



5-9

新築地劇団特別出演『太陽のない街』『大悲学院の少年達』（プログラム）

1932年

札大 [1116]

小山内薫（おさないかおる）（1881～1928）の築地小劇場から分裂発展し、31年にプロットに加盟した新築地劇団によって、ようやく大衆の街浅草に『太陽のない街』が持ち込まれた。プログラムの黒塗り部分は、共同印刷争議について書かれているのだろう。



5-10

神戸全線座『太陽のない街』（ポスター）

1932年

大原 [1159]

『太陽のない街』は、地方劇団がぜひとも実現したいあこがれの芝居。7月1日には京都青服劇場が単独公演を果たし、神戸全線座がすぐあとに続いた。だが9月3日に大弾圧。全線座最初で最後の大公演となった。

第3節 地方における文芸講演会



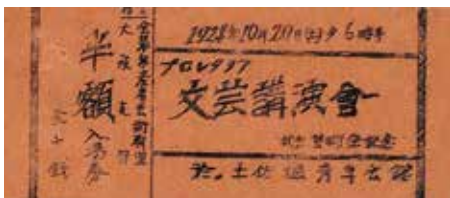
5-11

新興文芸研究会創立祝賀記念大講演会

1927年

大原 [0018]

新興文芸研究会は、後に日本社会党参議院議員になった羽生三七（1904～85）が、プロレタリア文化運動の影響を受け長野で組織した文学団体である。講師のひとり藤森成吉も長野出身で、彼の戯曲『何が彼女をさうさせたか』は1930年に映画化され大ヒットした。



5-12a

プロレタリア文芸講演会（半額入場券）

1928年

大原 [0023]

会場の「土佐堀青年会館」は大阪基督教青年会（現在の大阪YMCA）の建物である。入場料は半額で10銭とある。当時はコーヒーやうどんが1杯10銭程度、散髪代が50銭程度であった。



5-12b

文芸大講演会（チラシ）

1928年

大原 [0024]

全日本無産者芸術聯盟は「ナップ」の略称で知られている。講師は藤森成吉（5-11参照）。彼はナップの初代委員長でもあった。他には前衛芸術家で劇作家の村山知義、後に右派に転向した林房雄（1903～75）などの名が見える。



5-13a

戦旗防衛大講演会（チラシ）

1931年

札大 [2383]

『戦旗』はナップの機関誌で、独自の支局を持っていた。合法の雑誌で、普通の書店で購入できたが、たびたび発売禁止処分にあっていた。それでも、こうした講演会には数百人の聴衆が集まった。



5-13b

戦旗防衛大講演会 (チラシ)

1931年

札大 [2385]

上部に「五千円基金募集」とある。小学校教員の初任給が月額50円前後だったから、かなりの大金である。弁士の中條百合子は結婚後「宮本百合子」、窪川いね子は「佐多稲子」として知られた作家である。



5-14

戦旗ナップ防衛講演会 (チラシ)

1931年

札大 [2397]

『戦旗』とは別に『ナップ』という機関誌がつくられた。「戦旗ナップ防衛講演会」はこの二つの雑誌を守るためのもので、こうした講演会は頻繁に開催された。映像展示④『岡山と高知 作家同盟の講演旅行』は、そうした講演会活動の一部が映画として記録されたものである。

第4節 戦旗社支局のガリ版刷り



5-15

支局ニュース

1931年

浦西 [0060]

謄写版購入のためのカンパを読者に訴えている。雑誌『戦旗』を発行した戦旗社は、全国に支局を設けて購読者の獲得と誌代回収を担わせた。神戸支局発行の本資料からは、プロレタリア文化運動にとって謄写版（ガリ版）が必需品だったことが伝わってくる。



5-16

戦旗東京支局ニュース 第1号

1930年

大原 [2377]

支局ニュースは、読者と運動をつなぐ大事な手段であった。筆跡をそのまま再現するガリ版刷り資料には、製作者のさまざまな個性が表現されている。この東京支局ニュースのように、4コマ漫画も掲載されていた。



5-17

戦旗大阪中央支局ニュース 府県会選挙号

1931年

大原 [2420]

もちろんカットも武器になる。工場主に買収される労働者の心の揺れを描く田木 繁^{たきしげる} (1907～95)の短篇「一票三円也」は文章が黒インクで、まさに3円を受け取る瞬間のカットは赤インクで強調。うつろな目の家族の姿にひきこまれる。



5-18

鐘紡のみなさん！（戦旗を読みませう）

1931年

大原 [2440]

戦旗大阪中央支局製作の、2色刷りによる『戦旗』宣伝のチラシ。文化運動の中心となった雑誌『戦旗』は、弾圧のため書店で販売ができなくなった。そのため、全国に設立した支局を通して、直接読者に配布したのである。『戦旗』の読者網を拡げることは支局の使命ともいえる大切な仕事であった。

5-19

堀井謄写堂 HORII MYRIAGRAPH (謄写版印刷機 一式)

1926-1933年頃

個人蔵

コピー機が普及する以前は、滋賀県の堀井新治郎父子が1894年に発明した、この謄写版が、身近で手軽な印刷機だった。1980年代まで広く使用されていたため、展示をご覧のみならず、学校や職場で使った経験がある方がおられるのではないだろうか。戦前のプロレタリア文化運動でも、ニュースやピラやポスターは謄写版で刷られた。元版は、「ヤスリ」と呼ばれる鉄板の上に「ろう原紙」（ろうを塗布した薄紙）を置き、「ろう」を「鉄筆」（先端が鉄でできた筆）で削って作る。鉄筆で削った「孔」が、絵や文字の線となるのである。原紙と印刷用の紙を重ね、原紙の上でインクをつけたローラーをころがすと、孔からインクが染みこみ印刷されるという仕組みで、原理はシルクスクリーン印刷や「プリントゴッコ」と同じであった。原紙を鉄筆で削る際に、「ガリガリ」と音がすることから「ガリ版」と呼び親しまれた。謄写版印刷には、手作りならではの味わいがある。

第5節 地方を巡回する映画



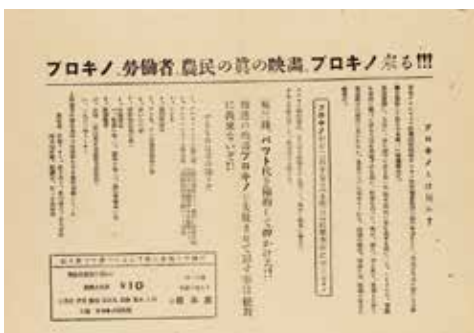
5-20

プロレタリア映画の夕（チラシ）

1931年

札大 [1949]

日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）主催の『プロレタリア映画の夕』は全国各地で開催され、記録映画を中心に多彩な作品が上映された。上映作品の中には、先駆的な影絵アニメーション『煙突屋ペロー』等もあった。



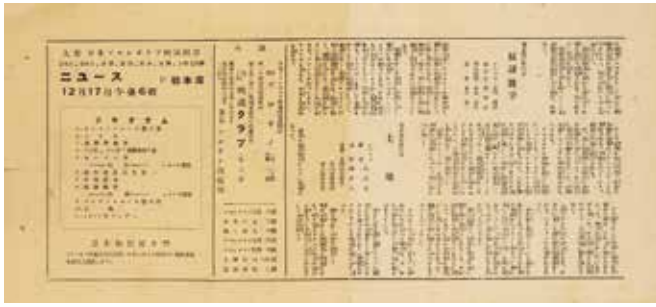
5-21a

「プロキノ巡回隊」勤労大衆券

1932年

大原 [1970]

「失敗させて帰す事は絶対に出来ない」と書かれているように、演劇と同様、映画も常に検閲と監視を受けた。「製作者」のうち、国木田虎雄（1902～70）は国木田独歩（1871～1908）と2番目の妻治子（1879～1962）の子であり、彼もまたプロキノに参加していた。



5-21b

プロキノ「ニュース」、長野上映会（プログラム）
1932年

大原 [1971]

上映プログラムは、多くのフィルムが現存しないプロキノ作品の実態を解明する上で貴重な資料である。梗概を読むと、彼らの制作した作品が階級や地域間格差、戦争や植民地など、様々な問題を訴えていたことがわかる。



5-22

1931年度プロキノ高知支部活動報告

1932年

小樽 [1974]

1931年11月下旬から12月上旬にかけての高知での巡回上映では、最大500名の観客を動員した。また、同時期に池田寿夫と江口渥、貴司山治が高知入りしており、現地の同盟員と交流をもった（→映像展示④）。



5-23

プロキノ第2期製作3百円基金募集！

1931年

浦西 [1941]

このチラシに書かれているように、映画は「強力な武器の芸術」である一方で、制作にはフィルム代や現像代など多額の費用がかかった。その費用をまかなうために、労働者や農民への寄付の呼びかけがたびたび行われた。



5-24

『われらの映画』10月創刊号

1932年

大原 [1969]

プロキノ地方支部は上映会を催すだけでなく、独自の映画も制作しようとしていた。大阪地方支部が独自に発行したこの雑誌には、大阪市バス従業員の戦いを描くシナリオ『車輪』（田木繁原作）が20ページにわたり掲載されている。

5-25

パテベビー

1920年代

個人蔵

フランスのパテー社が製造した9.5mmフィルムのカメラで、アメリカのコダック社の16ミリと並び、小型映画の主流をなした。プロキノではこれをブルジョア映画に対抗する武器として活用し、多くの作品を撮影した。

映像展示

プロレタリア文化運動では、小型カメラを街に持ち出し、ストライキやメーデーの様子などを撮影しました。カメラが小型化し、機動性にすぐれたものになったことで、人々は情報を「発信」するあらたな手段を手に入れたのです。

しかし、言論の自由、労働条件の改善、戦争反対などを主張するだけでも、労働者たちは多大な犠牲を払わされ、それを支援する人々は文字通り命の危険にさらされました。

不当な弾圧によって、戦前の日本の姿を記録した貴重なフィルムが多くが失われましたが、残された映像の不完全さも含めて、あらためて表現の自由、思想信条の自由について考え手みたいと思います。

文化運動において映画撮影を担ったのはプロキノ（日本プロレタリア映画同盟）でした。プロキノは1929年2月、ナップの構成団体の一つとして結成されます。そのルーツは、1927年3月頃に映画オタクだった東大生の佐々元十 {ささげんじゅう} (1900-59) が、トランク劇場内に映画班を設けたことでした。

佐々らが小型映画の機動性を活かし、これを左翼文化運動において政治的に利用したのに対して、貴司山治は家族旅行を記録するように仲間たちの姿を撮影しました。笑顔を見せる人々、手をふる仲間の姿など、緊迫した日々の中の穏やかな“日常”がここにあります。

① 『山本宣治告別式』 (2分12秒)

おかだ そうぞう
岡田桑三撮影・プロキノ東京支部制作

1929年

『DVD プロキノ作品集』所収

3月5日、治安維持法に反対していた労農党代議士・山本宣治（生物学者・産児制限運動家）が暗殺された。東京帝大仏教会館に向かう棺を官憲監視の中で撮影したプロキノの記念碑的フィルム。各地で上映された。

② 『第12回東京メーデー』 (7分04秒)

いわさき あきら
岩崎 昶 総指揮、岡田桑三撮影

1931年

『DVD プロキノ作品集』所収

東京・芝公園での第12回東京メーデーを記録した作品。集合地前での身体検査など、当時の厳格な治安警備を浮き彫りにする。遠方から撮影された終幕の進行は圧巻。労働者への共感が表現されている。

③ 『土地』 (6分00秒)

こうしゅうきち おかひでお
高週吉演出・岡秀雄撮影

1931年

『DVD プロキノ作品集』所収

富山県で発生した小作争議に取材し、団結する小作農民、土地をねらう土地会社、農民との共闘を模索する労働者たちの姿を再現映像を交えて描いた。全体の約半分が消失しているが戦前の小作争議を伝える重要な作品。

④ 『岡山と高知 作家同盟の講演旅行』 (6分34秒)

貴司山治撮影

1931年

個人蔵

農村部に文学サークルをつくることが求められ、作家同盟の地方公演旅行が企画された。前半は、11月24日、岡山のカフェ・パウルスタでの座談会風景。手前（右）から池田寿夫・猪野省三・江口渙 {えぐちかん} (1887～1975) が写る。中ほどは、高知に向かう船上と、高知城での散策風景（11月30日か。池田・江口らが写る）。そして後半は高地座および高知支部事務局前での撮影と思われる。プロパガンダのための映像ではなく、文化運動の内側から撮影された極めて貴重なホーム・ムービーである。

①②③ 六花出版提供（『DVD プロキノ作品集』所収）

参考文献：『DVD プロキノ作品集』別冊解説、同パンフレット <http://rikka-press.jp/wp-content/uploads/2015/05/prokino.pdf>

④ 伊藤純氏提供

参考文献：萬田慶太「貴司山治撮影『岡山と高知 作家同盟の講演旅行一九三一、十一—十二』について」（『フェンスレス』第3号、2015年5月）

第6章 子供—未来の闘士たち—

プロレタリア文化運動は、子供たちへの教育的実践という側面も持っていました。

そもそも「子供は純粋だ」といった考え方が日本で定着したのは、大正時代でした。児童雑誌『赤い鳥』に代表される「童心主義」の児童文学者たちによって、子供の純粋性・無垢性を強調する価値観が提唱されたのです。

しかしプロレタリア文化運動は、そうした純粋無垢な子供像について、この社会に存在する階級的問題を無視したものであると厳しく攻撃しました。プロレタリア児童文化を先導した^{まきもとくすろう}槇本楠郎（1898～1956）は、「王様」や「お姫様」の生活が、物語が、吾々のプロレタリア児童にとってどんな興味があろう！（『プロレタリア児童文学の諸問題』）と、断言しています。

第1節では、「子供」に向けてどのような文化を授けるべきであるのか、その難解な理論を「大人」たちが作り上げていく過程を追っていきます。

第2節では、子供たちをピオニール（少年少女の活動団体）へ勧誘するために使用された資料を紹介します。

第3節では、大人を対象とした文化運動の中に、子供向けの表現も並存している例を示します。こうした活動記録は、ある意味で「子供」を対等な存在として尊重していたと言えるのかもしれませんが。本章の最後に展示した「すごろく」は、楽しく遊びながら、闘士たる労働者への道も一緒に学ぶことのできる「娯楽／武器」であり、まさに大人と子供の区別なく、皆が丸く座っていた姿が見えるかのようです。

（泉谷瞬・中谷いずみ）

第1節 “正しい”プロレタリア児童とは？



6-1

新興教育研究所の活動報告

1932年

小樽 [2703]

プロレタリア教育の建設をめざす新興教育研究所は、1931年にコップに加盟し、教育労働者のみならず広く大衆に基礎を置く組織に転換すべく方向性を模索していた。これはその時期の活動報告書。



6-2a

『ソヴェートの友』4月号（第2巻第4号）

1932年

大原 [2697]

『ソヴェートの友』「教育特集号」では、ソヴィエトの教育制度が写真入りで紹介された。



6-2b

『ソヴェートの友』4月号（第2巻第4号）4～5頁

1932年

大原 [2697]

帝政ロシア時代には半数以上の児童が学校に通えなかったが、今はすべての児童が教育を受けられるようになったとある。



6-3a

第107回アサヒ・コドモの会（プログラム）

1935年

大原 [1503]

アサヒ・コドモの会（朝日新聞社会事業団）での「三匹の小熊さん」上演プログラム。演出は元構成劇場・プロット大阪支部の渡辺三郎（1896～1954）。原作は村山籌子（1903～46）。原作の画は夫の村山知義が担当した。1931年にはプロキノの岩崎昶によりアニメ化もされている。



6-3b

構成劇場ニュース No.1

1931年

大原 [0957]

構成劇場ニュースの「劇団日誌」。プロット加盟直前の構成劇場は「子供のための劇場」

という名でアサヒ・コドモの会でプロレタリア童話劇を上演していた。ミューレンはオーストリアの女性作家。この年の12月にはアサヒ・コドモの会主唱で「関西童話劇団盟」が結成された。



6-3c

児童演劇座談会（案内）

1935年

大原 [1502]

プロット解散前後に渡辺三郎が設立した児童芸術教育研究所（CAL）とアサヒ・コドモの会との共催。子供を観客とする児童演劇の現状や理論と実際などが、熱心に話し合われていたことを伝える一枚。

第2節 ピオニールへの呼びかけ



6-4

ピオニール諸君！

1933年

大原 [2748]

プロット大阪支部は、ブルジョアが占領した童話や童謡ではなく自分たちの芝居や唄を持つとピオニール劇団結成を呼びかけた。世界中のプロレタリアの子供が闘うための国際児童週間やピオニール世界大会の紹介も見られる。



6-5

少年劇団からみなさまへのおねがひ 第2回コドモのツドヒ案内

1933年

浦西 [1273]

注目すべきは、「大人の世界を子供の世界へおしつけること」への違和感が示されている点。「ミンナ」という言葉が目立つのも興味深い。劇団の名前募集など、それは「ミンナ」で作り上げるものだったのである。



6-6

少年劇団第2回公演「第2回コドモのユウベ」（チラシ）

1933年

大原 [1274]

芝居をただ見せるだけではなく、紙芝居の作り方・易しい絵の描き方が間に挟まれているように、プロレタリア児童文化では、子供たちの主体的な創作実践も目指されていたことが分かる。



6-7a
『レフト』第2巻第3号
1933年
大原 [0158]

労農芸術家聯盟（労芸）系列の雑誌。1932年7月に結成された左翼芸術家聯盟の機関誌で、金子洋文（1893～1985）、今野賢三（1893～1969）など、『種蒔く人』以来の文戦派首脳部が集まった。



6-7b
『レフト』第2巻第3号 14～15頁
1933年
大原 [0158]

プロレタリア童謡の楽譜。大人になって職工と農夫になった二人が搾取に立ち向かうべく団結、僕等もそれに続けという歌詞は、皆で歌うという行為と相まって階級意識の芽生えや闘争心を喚起する。

第3節 大人／子供の境界を越えて



6-8
第2回プロレタリア映画の夕（チラシ）
1930年
大原 [1925]

右下の破り取った跡は労働者割引券か？ 佐々元十監督の「子供」は、労働者の子供の遊びに親の闘いの模倣を見出し、次代の闘士を期待するというドキュメンタリー（フィルムは現存しない）。影絵アニメ「煙突屋ペロー」と共に上映された。



6-9a
東京左翼劇場移動小公演プログラム
1931年
札大 [0855]

しまきみやす 島公靖（1909～92）は、S・ウォーカーの童話劇「そら豆の煮えるまで」の主人公をプロレタリアの子供に置き換え、大人も対象とするプロレタリア劇にリメイクした。戯曲掲載誌『新興戯曲』（1931年2月）には「多喜二氏の小説「救援ニュース」中より拝借した所が多い」とある。雑誌校正段階で行われたこの公演の主人公は少年で（戯曲の主人公は少女）、戯曲に登場するスパイやダラ幹も配役されていないことがプログラムから分かる。



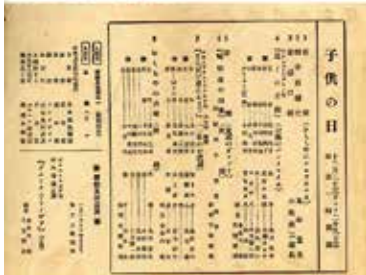
6-9b

築地小劇場第 18 回公演 子供の日 (プログラム)

1924 年

札大 [0295]

築地小劇場開場年の「子供の日」には、S・ウォーカー作「そら豆が(の)煮えるまで」が上演されていた。大正期童話劇の代表作ともいわれるこの作品は、斬首される王妃をかくまう少年の話だが、のちの島の戯曲ではビラを作る争議団員をかくまう話に書き換えられている。

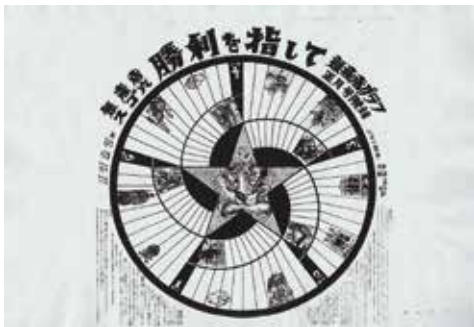


6-10

無産者スゴ六 勝利を指して (『無産者グラフ正月号 附録』)

1929 年

浦西 [2006]



プレイヤーはそれぞれ異なるスタート地点に立ち、マス目を回りながら先に中央まで辿り着くのが目的。ポスター貼りで一回休み、ゼネスト・共同耕作は出た目の倍進むなど、何もかもがプロレタリア風。渦巻き状のマス目と一体化した濃密な挿画を眺めているだけでも飽きない。掲載誌『無産者グラフ』は、柳瀬正夢を編集長・発行者として 1928 年 11 月に創刊された。

第 7 章 残された資料

大正末から昭和初期の日本には、芸術を通して社会変革に寄与したいと考えて、言論・思想を弾圧する法律のただ中にプロレタリア文化運動へと果敢に飛び込んできた人々が多数存在しました。

そうした人々の創作物——芸術作品のみならず、刊行物・手書きの文書なども——は今日の我々の目から見ても、運動者の意識・意欲に根差した強い生命力を持つ「生きた」資料と言えます。

これらの資料が一人でも多くの人の目に触れることで、とかく思想・イズムといった非人間的な空気で表されがちな左翼運動の内部において、実際に運動にコミットした人々が実に生き生きとした精神を発露していた事実を改めてうかがい知る縁となることを願います。

本章では、これまでの章に区分されない特殊な資料の数々を展示しています。

第 1 節では市立小樽文学館所蔵の「池田壽夫旧蔵資料」の中から特徴的な資料をご紹介します。

1932 年春の文化運動大弾圧関連が中心ですが朝鮮人運動・プロレタリア科学・反宗教運動など、特殊な立脚点を持つ資料を多く展示しています。

第 2 節では法政大学大原社会問題研究所所蔵の文化運動関連資料の中から特徴的な資料をご紹介します。

同研究所の特色を反映し、無産政党中央派に近い文化運動関連資料を多く展示しています。中には「全国芸術同盟」や「労農文化聯盟」など、活動が広く知られてはいない文化団体の資料も存在し、改めて文化運動の広さ・深さを感じられる展示となっています。

(立本紘之)

第1節 小樽文学館



7-1

大衆的抗議を以て暴圧に抗議せよ！（文化聯盟及び加盟各文化団体に
対する暴圧に対して）

1932年

小樽 [0098]

1932年3、4月の文化運動大弾圧への抗議文。弾圧＝敗北ではなく、支配階級の危機感の裏返しだとの現状認識が示されている。そしてその認識に基づき、資本主義・反動文化へのさらなる闘争を呼び掛けている資料である。



7-2

本部朝鮮委員会確立に際して 全国支部同志諸君に訴ふ

1932年

小樽 [1966]

コップの「第二次革命競争」関連資料。日韓併合（8月29日）・関東大震災での虐殺（9月1日）など「朝鮮委員会」独自の記念日を設け、いわゆる「記念日闘争」を独自の形で展開していたことがうかがえる資料である。



7-3

プロレタリア科学研究所救援部ニュース No.1

1932年

小樽 [2210]

1932年春の弾圧関連資料。同研究所ではコップ傘下の他団体にさきがけ、いち早く「救援部」を立ち上げ検挙者支援などを行っていたが、本資料ではさらに歩を進め、研究所を挙げた闘争への活動発展が強く訴えられている。



7-4

日本戦闘的無神論者同盟の一般活動報告 — 1931年11月以降現在迄—

1932年

小樽 [2228]

コップ結成から翌1932年上半年期までの活動報告資料。「初詣で」・「建国祭」への反対闘争など、同盟独自の活動が示されながらも、そうした動員が長続きしない（「カンパの後を組織」できない）点が自己批判されている。



7-5

コップ出版所だより No.1

1932年

小樽 [2492]

1932年春の弾圧直後のコップの出版活動を示す資料。コップ出版事業の財政危機を訴え、比較的回収が可能な「取次所」に対する機関誌「誌代完納」を求めるもので、「取次所調査表」というアンケート用紙が付属している。

第2節 大原社会問題研究所



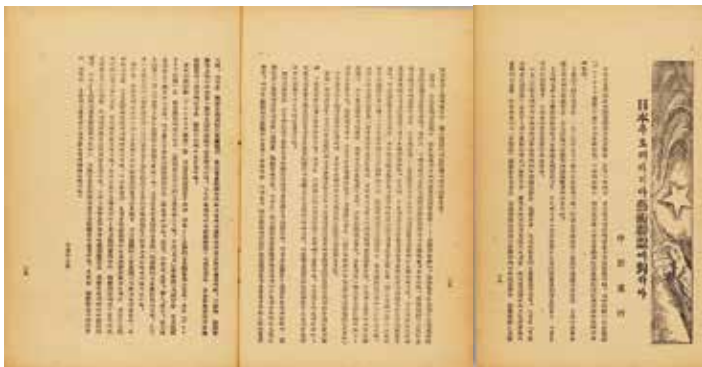
7-6a

『芸術運動 朝鮮プロレタリア〔プロレタリア〕芸術同盟機関紙』創刊号(第1巻第1号)

1927年

大原 [0019]

朝鮮プロレタリア芸術同盟 (KAPF カップ) 東京支社の発行とされる運動機関誌の創刊号。中野重治 (1902～79) が「プロ芸」成立からの歴史とその運動の正当性を漢字ハングル交じり文で寄稿している。



7-6b

中野重治「日本プロレタリア芸術聯盟に對して」(日本プロレタリア芸術聯盟に對して) 27頁

1927年

大原 [0019]

7-6aの説明で触れた中野重治の寄稿文。「プロレタリア劇場」や「RA」(美術部)など、プロ芸の多様な活動アピールが見られるのも特徴的である。この文章は尹学準 (1933～2003) が日本語に訳し、旧

版『中野重治全集』月報第19巻(筑摩書房、1963年)に収録されたが、後年水野直樹 (1950～) と中野本人の手が加えられ、第2次『中野重治全集』月報第28巻(1980年)に収められた。



7-7

新文戦ニュース NO.2

1934年

大原 [0192]

1934年9月に、左翼芸術家聯盟・プロレタリア作家クラブの再合同で誕生した「労農芸術家聯盟」の関連資料。本資料は「労芸」に近い経済学者向坂逸郎 (1897～1985) の旧蔵資料で、大原社研資料の特色を示す資料の一つとなっている。



7-8

大原社会問題研究所後藤貞治宛葉書

1930年

大原 [0755]

「構成劇場」の「合評批評会」案内。宛先の後藤貞治 (1896～1945) は当時大原社研で資料収集に当たっていた人物で、大原社研に多くの文化運動関連資料が所蔵され得たのは、後藤と文化団体のこうした交流が大きく影響している。



7-9

『勞農文學』創刊第1号

1933年

大原 [0153]

旧「労芸」解散後、葉山嘉樹（1894～1945）らが結成したプロレタリア作家クラブ機関誌。随所に見られる「批評家」批判などに、ナッパーコップ系列の人々や、旧労芸首脳（青野季吉（1890～1961）ら理論寄りの人々）と異なる立脚点が見て取れよう。



7-10

全国芸術同盟規約草案

1927年

大原 [2587]

日本労農党（無産政党中間派）を支持する目的で、1927年11月に結成された文芸団体「全国芸術同盟」の規約草案。「芸術的活動」での政党支援をここまで明言した資料は珍しく、文化運動全体で見ても価値ある資料である。



7-11

新文化団体組織について

1932年

大原 [2454]

合同無産政党 社会大衆党の結成を前に、設立が目指された無産政党系文化団体「労農文化聯盟」の組織準備関連資料。「ウルトラ」＝共産党系の文化聯盟（コップ）に対抗しようとする「大衆政党」側の意気がうかがえる。



7-12

前衛芸術家同盟 久保田政雄宛書簡（プロ芸・前芸合同に関する経緯の説明）

1927年

大原 [2621]

プロ芸・前芸の合同協議の動きと当面の地方運動方針を伝える書簡。組織合同にプロ芸側が積極的なのに対し、前芸側は「共同斗争」（翌年の「左翼文芸家総連合」につながる）を重視するという方針の違いが垣間見える。

[企画展] いま、プロレタリア芸術が面白い！ 知られざる昭和の大衆文化運動

会 期：2019年7月6日(土)～8月18日(日)

会 場：市立小樽文学館

主 催：昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会・市立小樽文学館

協 賛：法政大学大原社会問題研究所

協 力：公益財団法人日本近代文学館・札幌大学・丸善雄松堂株式会社・六花出版株式会社

後 援：小樽文学舎

会期中の催し：

7月15日(月) 13:30～14:30 講演会①

「駆け抜けていった人・多喜二の後ろ姿」 伊藤 純 (プロレタリア文学研究家)

7月20日(土) 17:30～19:00 上映会・解説

「プロレタリア映画『山本宣治告別式』ほか、全6編」足立 元 (二松學舎大学・講師)

8月10日(土) 13:30～14:30 講演会②

「再発見！ 昭和の大衆文化運動」 村田裕和 (北海道教育大学・准教授)

解説執筆：

はじめに

村田裕和・伊藤純

第1章 一枚のピラから見えてくる「新たな世界」

伊藤・村田

第2章 メディアの中の小林多喜二

鳥木圭太・内藤由直・木村政樹

第3章 大衆を動員せよ！ ―プロレタリア演劇運動―

鴨川都美・正木喜勝

第4章 赤い筆 ―プロレタリア美術運動―

足立元

第5章 運動の最前線 ―地方でたたかう人々―

和田崇・武田悠希・池田啓悟・雨宮幸明

第6章 子供 ―未来の闘士たち―

泉谷瞬・中谷いずみ

第7章 残された資料

立本紘之

企画・構成：村田裕和

編集：昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会 (北海道旭川市北門町9丁目)

発行：市立小樽文学館 (北海道小樽市色内1-9-5)

印刷日：2019年6月30日

発行日：2019年7月5日

本書はJSPS 科研費JP18H00621の助成を受けています。

いま

70 シタ
ア 芸術が
面白い！

知られざる昭和の大衆文化運動